

# 日本列島上の歴史と文化における

## もう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群”

——「広日本—中日本対立分布」Ⅱ地図集（人類学・考古学・民俗学篇）——

安部 清哉

### 一、はじめに

日本語の方言分布には、広く知られるように、フォッサマグナに沿って走る東西対立境界線がある。

「糸魚川・浜名湖線」と呼ばれているこの境界線は、日本語方言分布の重要な境界として、方言区画上、重きをおかれることもあり、また、日本を東西に二分する対立境界線として、その成因も含め注意を向けられてきた。

また、歴史や文化における多くの現象においても、この位置で東西対立が認められることも知られている。

一方、それとは別に、本稿執筆者は、もう一つの東西対立境界線とも言うべき境界線が存在していることを見出した。それは、日本語方言においてばかりでなく、人類学・考古学・民俗学・遺伝学など、様々な研究領域においても同様に見出すことができた。

ここでは、日本語方言について報告した安部（1997b・1998）の続編として、これらの研究領域において

見出した、もう一つの東西対立境界線について、分布地図を提示して、簡単な報告を行うことにする。

一、もう一つの東西対立境界線「関東・越後線群」

日本語の方言分布の形成を、言語地理学的観点から解釈していくと、そこには幾つかの歴史的段階が認められる(安部(1987))。特に、周圏論的に、「中央からの言語の伝播による分布形成」という仮定に立って歴史的に解釈していくと、日本語方言の分布には、語の伝播範囲とその時代的相違の上で、大きくは四つの段階として把握できるような、段階的展開が認められると解釈された(安部(1993a))。

しかし、歴史的解釈も、文化的中央と呼べるようなものが成立する以前の、古い時代に及ぶことになる、「中央からの言語の伝播」という単純な周圏論の適用によっては解釈し得ないことが明らかである。(安部(1993a・1994))。その意味で、古代に形成されたような分布の場合は、異なった観点からの解釈が課題となってくる(安部(1993a・1993b・1993c・1996))。

そのような古い段階の方言分布を、周圏論によるのではなく、別の観点から言語地理学的に解釈していく方法の一つとして、周圏伝播的な過程によって形成されたのではない分布特徴を、古代の分布に新しく見つけ出していくことが考えられる。

そのような観点に立って、古い段階の分布(安部(1987))以下において、「古代全国層」としたものを再調査していくと、周圏論的解釈では説明しがたい分布特徴をいくつか見出すことができた。

その一つに、「糸魚川・浜名湖線」におけるフォッサマグナのような地理的背景をもっていないにも関わらず存在している方言境界線がある。そのような境界線の一つとして、多く、関東と越後(ないし北陸)越の国、一部は山陰まで及ぶ)の間を走っている境界線がある。それは、「糸魚川・浜名湖線」とは別に、もう一つの東西対立と言えるよう

な対立分布を、多くの言語事象に互って形成している。

しかも、この、もう一つの東西対立境界線を有すると考えられる分布には、共通したある種の特徴が看取される (ABE Seiya (1967・7・28) 口頭発表)。それゆえ、筆者は、それらを、仮に「関東・越後線群 (略称・関越線)」と名付け、提示した (安部 (1997b・1998))。

ところで、この境界線は、方言区画論の分野では、重視する区画案 (金田一春彦氏の第二次案) も提示されているが、必ずしも十分議論されることがなかった。また、言語以外の分野においては、これまでほとんど注目されることがなかった。

しかし、方言分布におけるこの「関東・越後線群」に、一定の共通する特徴が認められるということは、一方の「糸魚川・浜名湖線」における東西対立がそうであるように、言語以外の事象においても、同様の位置に東西対立が形成されている可能性が、おそらくは極めて高いであろうことが、予想された。

そのような予測のもとに、関連分野における諸現象の分布を探って見ると、文化人類学・形質人類学・生体人類学・考古学・民俗学・動物遺伝学、等々の、広い研究領域においても、極めて類似した位置に、同様の対立境界があることを見出すことができた (安部 (1997・11・29) 口頭発表)。

このことは、この境界線が、「糸魚川・浜名湖線」と並ぶ、重要な方言境界を形成していることを意味していると解釈される。

### 三、「糸魚川・浜名湖線」と「関東・越後線群」との相違

「糸魚川・浜名湖線」と「関東・越後線群」とは、共に言語以外の分野でも同様の境界線を形成しているという点で共通するが、総合的に見ると、次のような相違が指摘できる。

- ① 相対的に見て、「関東・越後線群」の方が「糸魚川・浜名湖線」より古い可能性が高い。
- ② 「関東・越後線群」における相違には、ある種の一定の共通した特徴（意味的・機能的相違）が認められる。
- ③ 「関東・越後線群」における相違の方が、「糸魚川・浜名湖線」よりも、比較的多様性をもっている傾向がある。

④ 「関東・越後線群」における相違の方が、「糸魚川・浜名湖線」よりも、質的にドラスティックなものが多い（例えば、母音、アクセントなど）。

⑤ 「関東・越後線群」における相違には、周辺部（「広日本分布」（注1））のもつ特徴から内部（「中日本分布」）のもつ特徴への変化という方向性が看取される。

⑥ 「糸魚川・浜名湖線」は、文化的中央からの比較的ゆるやかな文化的影響によって形成された、というような要素が認められるのに対して、「関東・越後線群」は、大規模な人の移動を伴うような側面が看取される。

右の諸点についての解説は、今後、個々の地図の解釈とともに述べていく予定であるが、現時点における、これらの概観的傾向からみても、このもう一つの対立境界線と位置付けられる「関東・越後線群」は、慎重に検討していく必要のある重要な研究課題であろうと思われる。

今後、その日本列島上における歴史の意味を、学際的研究領域に互って研究していく必要があるだろう。

#### 四、〃関東・越後線〃の学際的研究の必要性——言語史研究からの提言

本稿で提示する分布地図は、最初にも述べたように、日本語方言に見られるこの境界線に気づいて後に収集したものである。

これらの分布を、従来の東西対立境界線と区別して扱ったものは、言語学以外の分野では、専門外の分野ということもあるが管見には入らなかった。それゆえ、これらの分野では、これまでは、この「関東・越後線群」の存在の意味は、あまり問題にされてこなかったものと思われる。

これらのような対立境界線をもつ候補地図は、この原稿をまとめている間も増え続けており、まだ多くの該当分布が存在している可能性が高い。この境界線の解釈を進めるためにも、今後、まずは関連する研究領域にわたって該当する分布地図を広く探していく必要がある（注2）。

また、併せて、今後あらたな調査を行っていく際には、次のような点にも注意を向けていくことを広く提案したいと思う。

① 県単位・地方単位（例、関東地方）よりも、より細かな地域区分による分布図の作成の必要性

② 年代の分かるものは、例えば、縄文時代・弥生時代というよりも、より細かな年代区分や絶対年代による調査の必要性

③ 種々の境界線の性質の相違とそれらの境界線の時代による推移への配慮

因に、③に関わって付言すれば、言語篇の分布地図を見る限りにおいても、現時点では、「関東・越後線群」には、時期ないし成因を異にする、少なくとも二、ないし、三種の境界線が含まれている可能性があると考えている。

ところで、日本語学の分野では、本稿のような特別の扱いこそされなかったものの、間接的なものも含め、ある程度注意は向けられてきている。例えば、金田一春彦氏、藤原与一氏、上村幸雄氏、徳川宗賢氏、佐藤亮一氏などの言及がそれである。その中でも、藤原与一氏は外側の分布が最も古い日本語であると位置付け、佐藤亮一氏は、境界線が西から東へと東遷してきた可能性を指摘し、上村幸雄氏はこの境界線が銅鐸文化の時代には既に成立していた可能性があるとしている。また、それとは別に、本稿執筆者には、より北側にあつたものが一旦南側に後退したような側

面にも注意を向けておく必要があるように思われる。これら、先行研究での言及については、稿を改めて取り上げていきたい。

五、おわりに

本稿では、以下に、「関東・越後線」をもつと考えられる分布について、考古学・人類学・民俗学・遺伝学の諸研究領域における当該地図を提示する。

これらの境界線が、均質のものか、それとも異なる性質をもつ数種の境界線よりなるものであるか、あるいはまた、これらの中にも歴史的段階的前後関係があるかどうか、などの問題は、今後、検討を重ねていく必要があると考える（本稿で「群」とあえて複数扱いしているのは、そのような意味も含まれる）。

言語篇の地図については、安部（1998）などで順次その解釈を始めているが、本稿の地図の一つひとつの解説も、今後、稿を改めて行っていくことにしたい。

「関東・越後線群」分野別目次

考古学

- [1] アスファルト付着物の出土地
- [2] 縄文時代晩期土器の分布圏（亀ヶ岡式土器の分布）
- [3] 弥生時代前期の土器の分布圏（遠賀川式―大洞A式）
- [4] 弥生時代の遺跡分布
- [5] 弥生時代の人口密度分布

[6] 方形周溝墓の分布（弥生時代の墓制）

[7] 三角縁神獣鏡の出土地

[8] 短甲の出土地（三世紀終り以降出土）

### 人類学（文化人類学・形質人類学・生体人類学）

[9] ①頭長幅示数分布

[9] ②頭長幅示数分布（示数81・5%以上の分布）

[10] ①血液型A因子の等位線

[10] ②血液型A因子の等位線（ $p \parallel 2.7$ 以上の分布）

[11] 顔高（高顔・低顔）の地域差

[12] 長寿県

### 民俗学

[13] 食べ物文化圏（そば食文化圏）

[14] 母乳中のPCB平均濃度（食物文化）

[15] 餅なし正月の分布（焼畑農耕地域における稲作農耕の受容）

[16] ①民家の諸指標の分布（地床形式・土間極小型―縦穴式住居の伝統）

[16] ②参考図 民家の特色

[17] ①本家・分家集団の呼称（同族結合―溝組結合）

[17] ②参考図 本家・分家集団の呼称／長男・長女の類別呼称

[18] 本家・分家間の序列と交際（同族結合―溝組結合）

[19] 家を継ぐ者

[20] 隠居の居住制

[21] 長男・長女の類別呼称（オジとオトウト、オバとイモウトの分化）

[22] ①日本神話・倭建命の東征範囲（西日本中央勢力の支配範囲）

[22] ②日本神話・神武天皇の東征範囲（西日本中央勢力の支配範囲）

## 遺伝学

### 哺乳動物遺伝学

[23] ①ハツカネズミの分布（人の移動に伴）

[23] ②参考図 ハツカネズミの分布の成立経過（アジアの民族移動）

### 「関東・越後線群」の基盤として考慮される分布

[A] 森林分布（ナラ林帯―照葉樹林帯）

[B] 年間平均気温の等温線

[C] 関東平野の縄文時代の海岸線

[D] 細石刃の文化圏



## 参考図

言語地理学から見た日本語方言の重層性

### 注

注1 対立分布のいくつかには、関東・越後線の北側の特徴が、九州以南にも分布するものが見られる。そのような傾向から見て、この分布（の少なくとも一部）は、日本の外側の分布とその内側の分布という対立をもつと考え、「外日本分布対中日本分布」という対立分布をなすととらえた（安部（1997b・1998））。

しかし、言語以外のこれらの分布特徴を見ていくと、この「外日本分布」では、北側と南側が偶然に同じ特徴をもったというよりも、古くは日本列島が広く「外日本分布」のような特徴をもっていたところに、後から「中日本分布」の特徴が拡大してできたものである可能性が高いのではないかと考えられる。

その意味で、この「外日本分布」は、「中日本分布」に対して基層的性格をもっていることになる。そのような点を考慮すると、「外日本分布」は外側のみに限定されているととらえるよりも、「中日本分布」よりも広い分布範囲をもつ「広日本分布」としてとらえておいた方が、より広い視点からの解釈を可能にするように思われる（安部（1997a・b）では、仮説として既に「Wide distribution」と解釈している）。

注2 考古学関係の分布地図と、言語関係でも地名についての分布地図には、次の文献があり、それぞれから、数十項目に及ぶ同様の分布を見出すことができる。それらについても、順次報告していく予定である。

日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫（1992）『図解・日本の人類遺跡』（平成4・9、東京大学出版会）  
鏡味完二（1958）『日本地名学 地図篇』（昭和33・3、日本地名学研究所）

「付記」方形周溝墓については、専門家である山岸良二氏（東邦大学付属東邦中高等学校教諭・考古学）に資料をご提供いただきご教授いただいた。記して深く感謝申し上げます。

## 参考文献（掲載地図典拠ほか）

泉 靖一・大給近達・杉山晃一・友枝啓泰・長島信弘（1963）『日本文化の地域類型』（『人類科学』15、昭和38・3）

- 泉 靖一・大給近達・杉山晃一・友枝啓泰・長島信弘(1978)『日本文化の地域類型』(大野晋・祖父江孝男編『日本人の原点』)  
文化・社会・地域差』、昭和53、至文堂)
- 岩本光雄(1963)『生体人類学からみた日本の地域性』(『人類科学』15、昭和38・3)
- 荻原浅男校注(1973)『日本古典文学集 古事記 上代歌謡』(昭和48・11、小学館)
- 学習研究社(1996)『謎の東北王国・三内丸山』(平成8・6、学習研究社)
- 鎌木義晶編(1965)『縄文時代(日本の考古学II)』(昭和40、河出書房新社)
- 小浜基次(1960)『生体計測学的にみた日本人の構成と起源に関する考察』(『人類学研究』7、昭和35・4)
- 小山修三(1984)『縄文時代——コンピュータ考古学による復元——』(中央公論社)
- 近藤 弘(1973)『日本人の食物誌』(昭和48、毎日新聞社)
- 佐々木高明(1991)『日本史誕生(日本の歴史①)』(平成3・5、集英社)
- 佐々木高明(1993)『日本文化の基層を探る』(平成5・10、NHKブックス)
- サンデー毎日編集部(1997)『日本人を科学する』(『サンデー毎日』平成9・5・25日号、後日出版される予定)
- 杉本尚次(1977)『地域と民家——日本とその周辺——』(昭和52・7、明玄書房)
- 鈴木秀夫(1978)『森林の思考・砂漠の思考』(昭和53・3、日本放送出版協会)
- 鈴木秀夫(1987)『民俗の移動と言語の分布』(『言語』16・7、昭和62・6、大修館)
- 田中 琢(1991)『倭人争乱』(平成3・7、集英社)
- 坪井洋文(1979)『イモと日本人——民俗文化論の課題』(昭和54・12、未来社)
- 坪井洋文(1986)『農耕民俗の二元性』(森 浩一編著(1986)『日本の古代4 縄文・弥生の生活』、昭和61・6、中央公論社、いま1996の中公文庫版による。)
- 埴原和郎(1990)『日本人新起源論』(平成2・9、角川書店)
- 古畑種基(1962)『血液型の話』(昭和37、岩波新書)
- 水野祐監修(1992)『逆説の日本古代史』(平成4・6、KKベストセラーズ)
- 山口 敏(1986)『日本人の顔と身体』(昭和61・7、PHP研究所)
- 山岸良二(1981)『方形周溝墓』(昭和56・5、ニュー・サイエンス社)
- 山岸良二(1996)『関東の方形周溝墓』(平成8・12、同成社)

- LEVIN (1971) (山口 敏 (1986) によるもの未確認)
- H.YONEKAWA, K.MORIWAKI, O.GOTOH, N.MIYASHITA, Y.MATSUSHIMA, L.SHI, W.S.CHO, X.L.ZHEN, and Y. TAGASHIRA (1988) : Hybrid origin of Japanese mice “*Mus musculus molossinus*” : Evidence from restriction analysis of mitochondrial DNA, *Mol.Biol.Evol.*, 5, pp.63-78, 1988.
- 安部清哉 (1987) 「全国方言分布の成立過程における四つの層」(『国語学会昭和62年秋季大会要旨集』(岐阜大学)、昭和62・10)
- 同 (1993a) 「語彙における伝播の中心地と伝播の範囲による方言分布成立過程の解釈の問題——「方言四層」の補説・修正として——」(『フェリス女学院大学文学部紀要』28、平成5・3)
- 同 (1993b) 「語の『動的運動』と音韻上の『静的作用』とによる方言分布の二重構造の一側面」(『国語学会平成5年春季大会要旨集』、平成5・5)
- 同 (1993c) 「古い方言・新しい方言」(『言語』22-9、平成5・9)
- 同 (1994) 「方言圏論は万能か」(『国文学解釈と教材の研究』39-14、平成6・12)
- 同 (1996) 「古い方言と新しい方言の問題」[付注版] (『玉藻』31、平成8・3)
- 同 (1997a) 「『日本語地図』偏在分布Ⅱ語形地図集——西日本分布・東西対立分布・三地域鼎立分布——」(『フェリス女学院大学文学部紀要』32、平成9・3)
- 同 (1997b) 「もう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群” ——「外日本—中日本対立分布」Ⅱ地図集——」(『フェリス女学院大学国文学会』『玉藻』33、平成9・8)
- 同 (1997・11・29) 「日本語と日本文化におけるもう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群” (日本文芸研究会平成九年度第二回研究発表会、於・共立女子大学文芸学部)
- 同 (1998予定) 「日本語におけるもう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群” ——「広日本—中日本対立分布」Ⅱ地図集(言語篇2) ——」(『立正大学国語国文』36、平成10予定)
- ABE Seiya (1997・7・28) ‘Several Strata in the Historical Formation of Japanese Dialects’: 2nd International Congress of Dialectologists & Glottologists (cf. abstract & hand out, 1997・7・28-8・1, Vrije Univ. in Amsterdam, The International Society for Dialectology and Glottistics, (国際方言学地理言語学会 第2回国際大会) 口頭発表)
- あべせいや (1997) 『日本語の起源——日本語のルーツをさぐったら』(ことばの探検2) (飛田良文責任編集、平成9・4、アリス館。第五・六章をまとめるにあたっては、「関東・越後線群」も考慮された。)

日本列島上の歴史と文化における

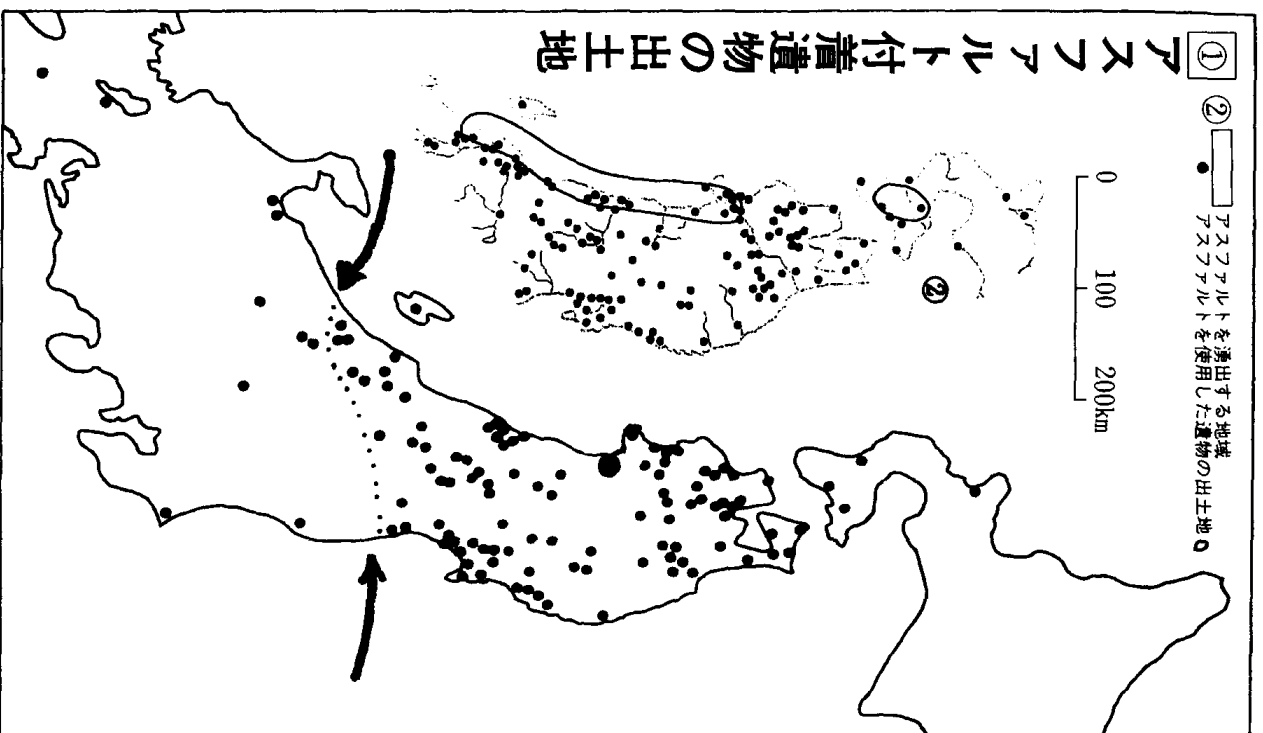
もう一つの東西対立境界線

## “関東・越後線群”

「広日本—中日本対立分布」三地図集

人類学・考古学・民俗学 篇

[1] アスファルト付着物の出土地 [①水野祐 (1992) より]  
[②学習研究社 (1996) より]



[2] 縄文時代晩期土器の分布圏 (亀ヶ岡式土器の分布)  
 鎌木義晶 (1965) [佐々木高明 (1991) より]

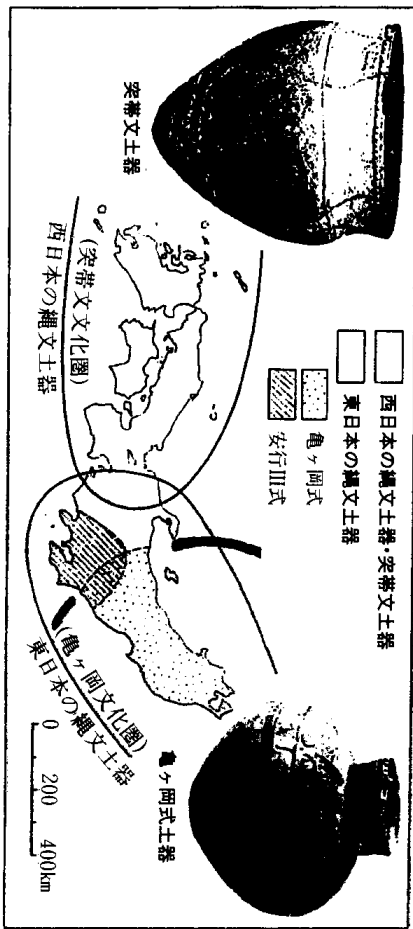


図58 縄文時代晩期の土器分布圏 (鎌木義晶, 1965による。ただし亀ヶ岡文化圏、突帯文文化圏の名称は佐々木が記入した) 写真左が突帯文土器。口縁部と胴部上方に細かい粘土の帯 (突帯) がある。大津市滋賀里遺跡出土。滋賀県教育委員会。右は亀ヶ岡式土器。幾何学文様の線刻をし、縄文を磨り消しにしている。宮城県沼津貝塚出土。東北大学文学部考古学研究室/講談社。

[3] 弥生時代前期土器の分布圏 (遠賀川式—大洞A式)  
 鎌木義晶 (1965) [佐々木高明 (1993) より]

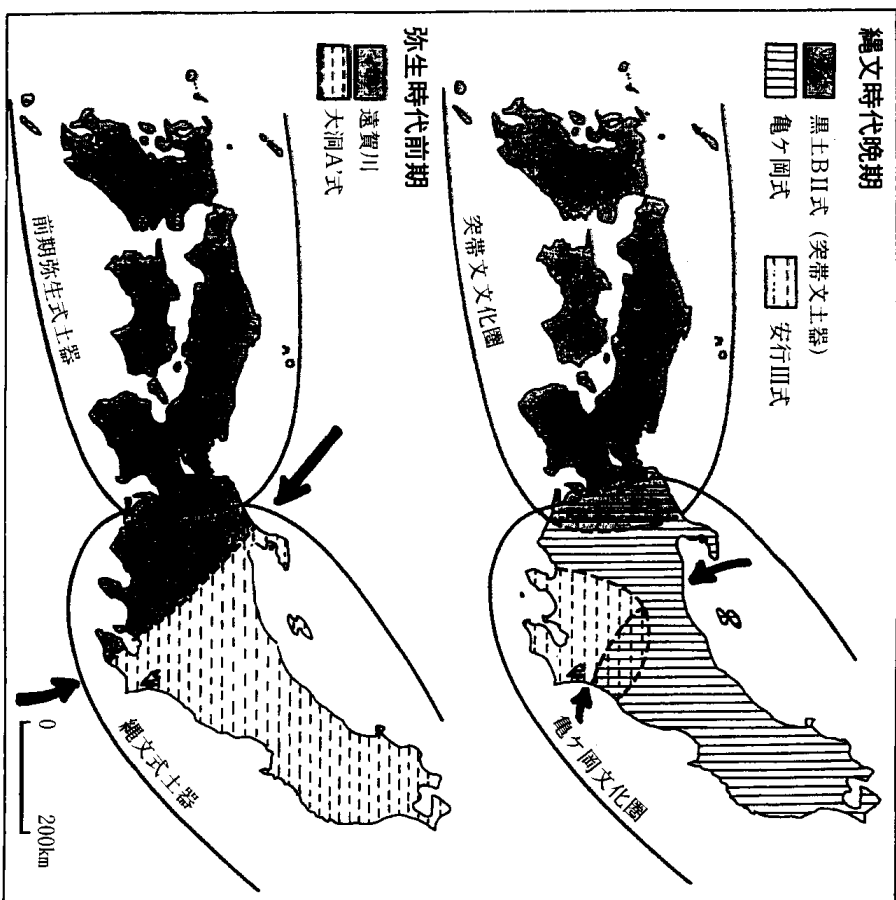
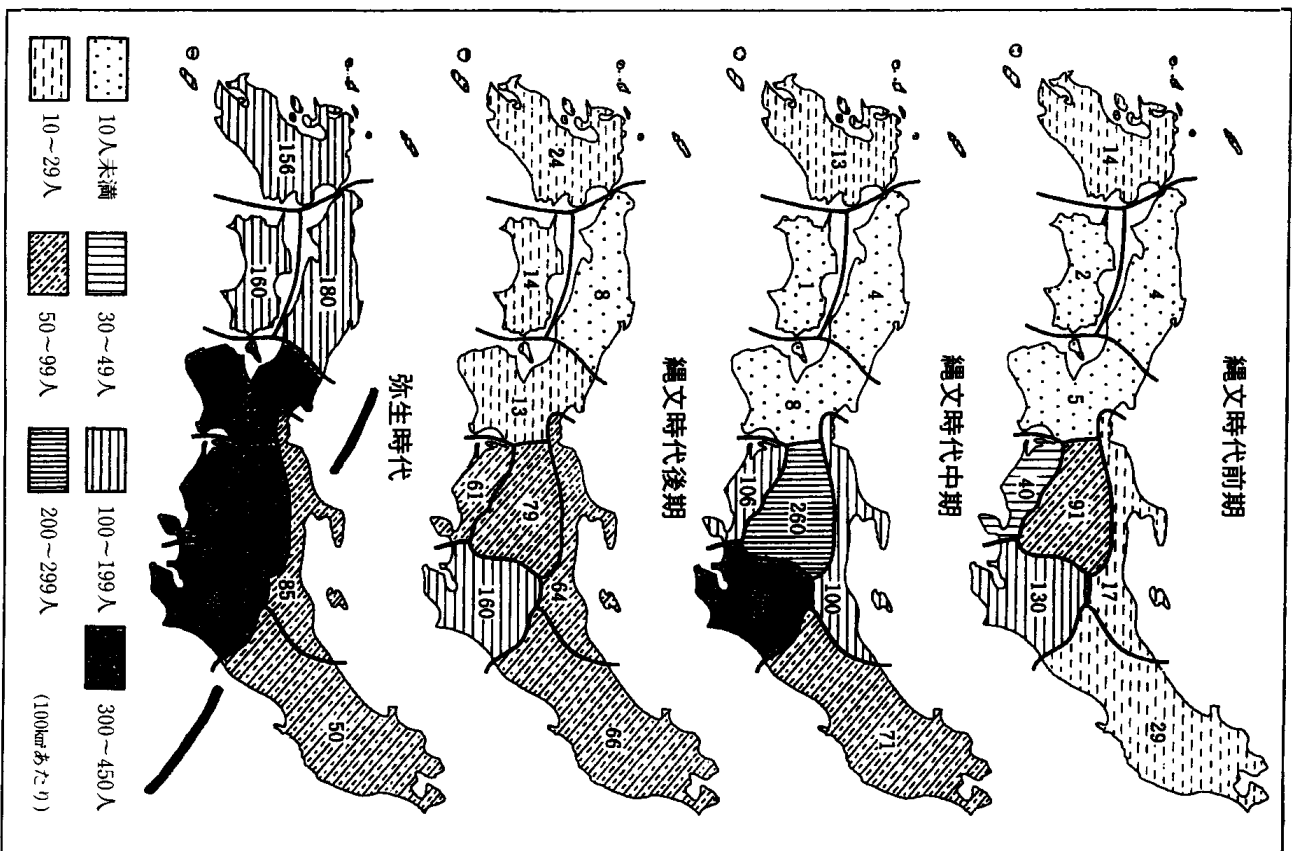


図6-9 縄文時代晩期から弥生時代初期の土器の分布圏 (土器型式の分布は鎌木義晶による。ただし亀ヶ岡文化圏・突帯文文化圏の名称は佐々木が記入した)

[ 5 ] 弥生時代の人口密度分布 小山修三(1984)  
 [佐々木高明(1993)より]

図6-10 縄文時代・弥生時代の人口密度分布 (小山修三原図)



[ 4 ] 弥生時代の遺跡分布 小山修三(1984)  
 [植原和郎(1990)より]

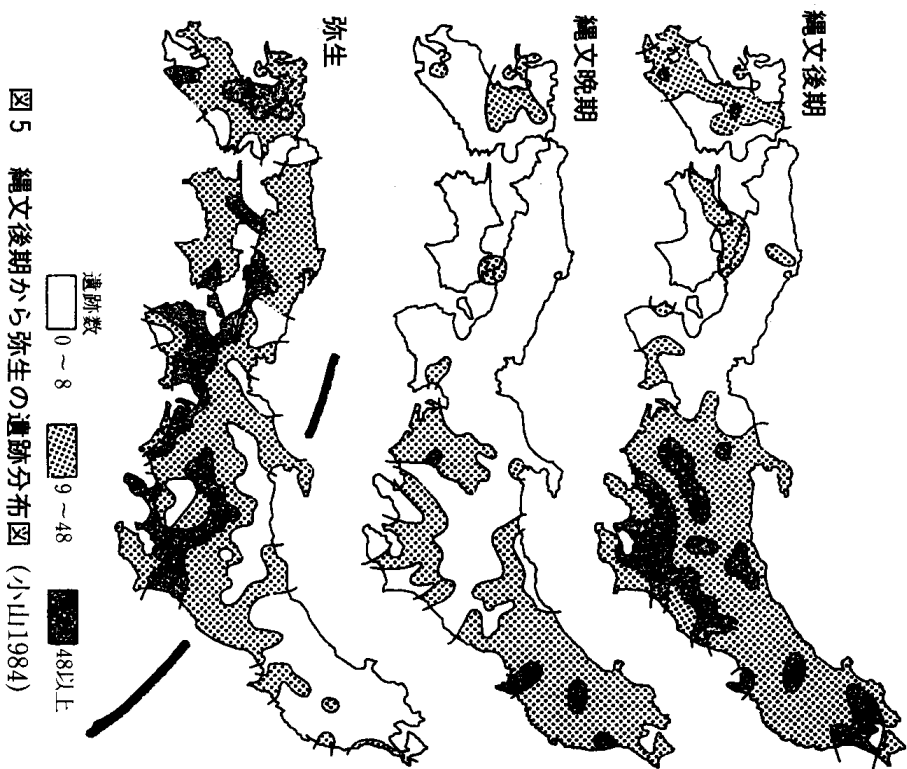


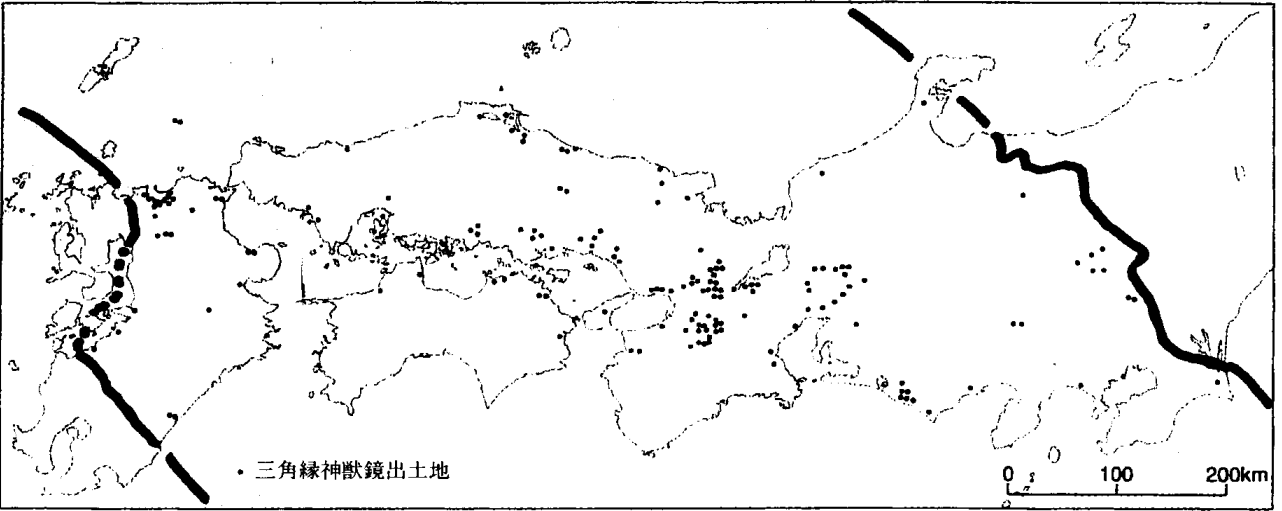
図 5 縄文後期から弥生の遺跡分布図 (小山1984)

III 最近調査された主な遺跡

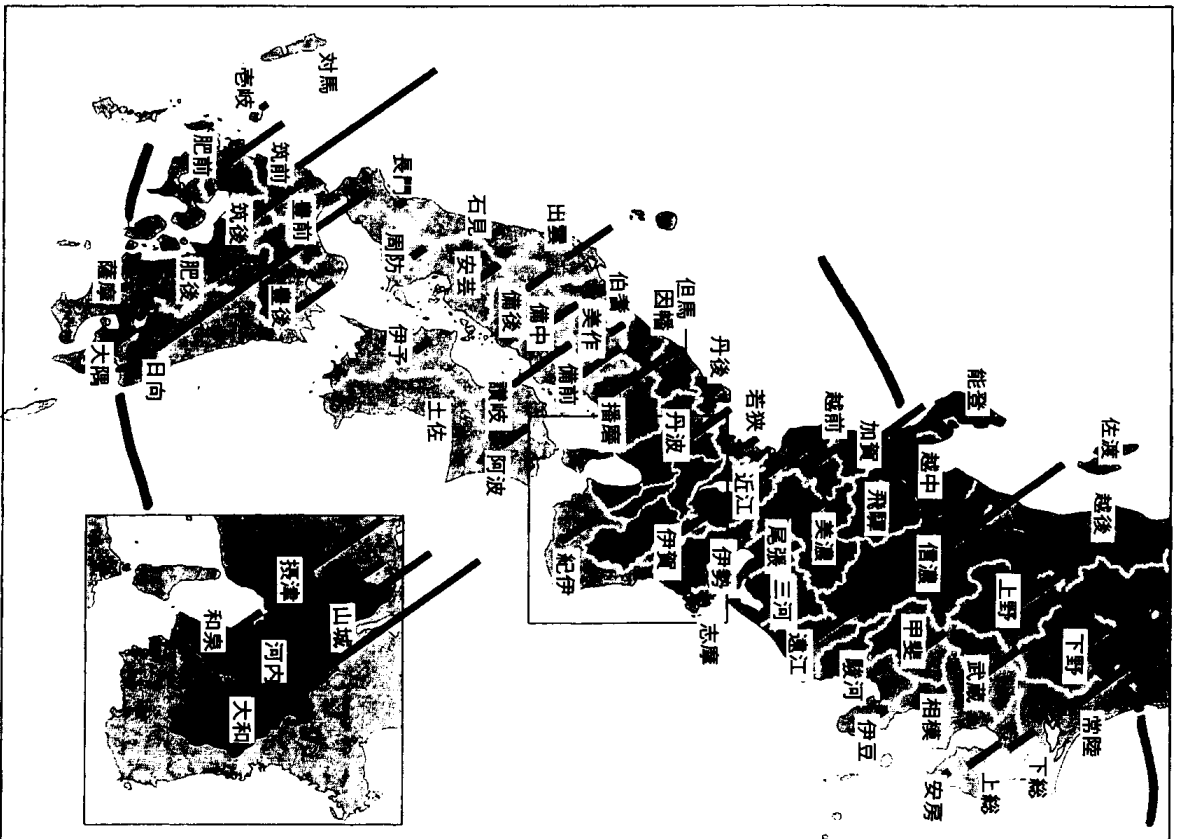
弥生後期までの方形周溝墓⇨  
の東遷ライン

1990年現在でもほぼ同様とされる。  
(山岸氏私信による。山岸(1996)参照)





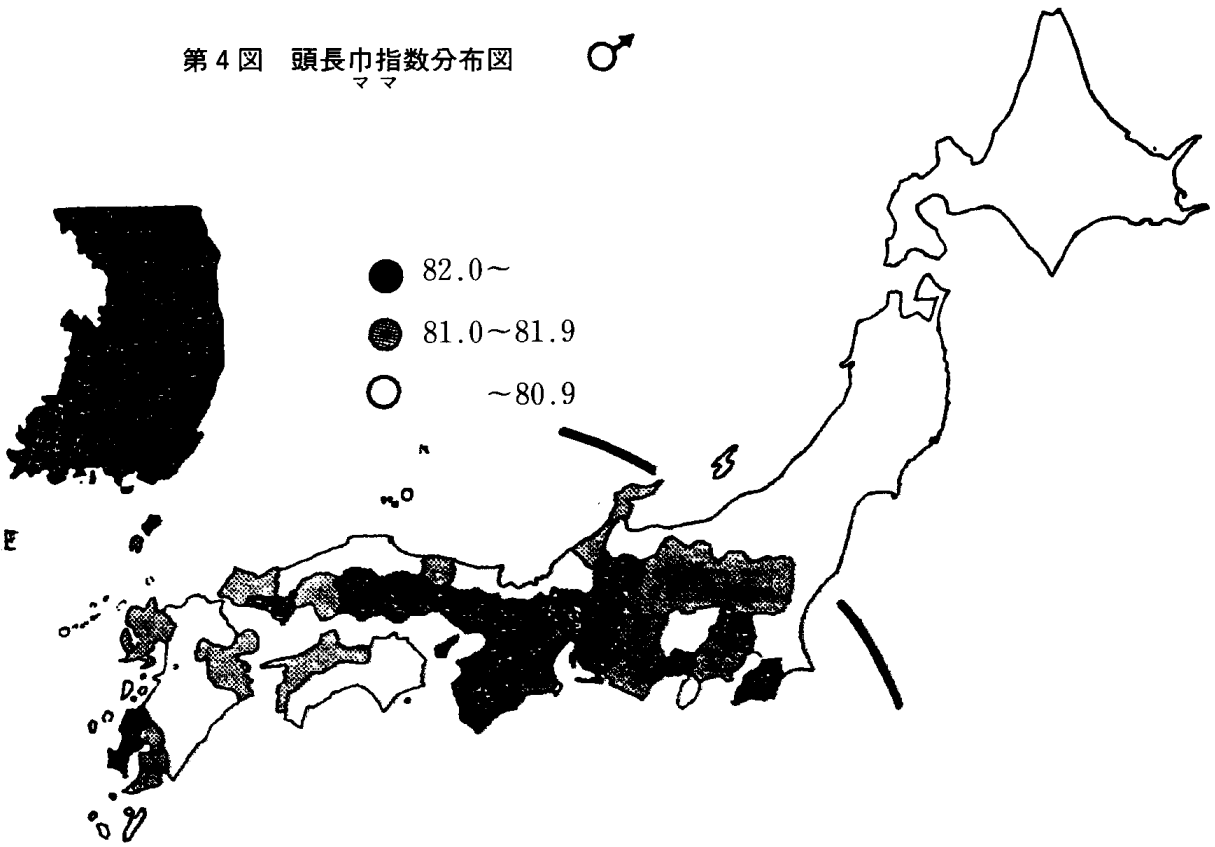
155 三角縁神獸鏡の出土地点 三角縁神獸鏡は中国王朝の権威の象徴だ。その権威を利用した勢力が大和にあった。それが配布した三角縁神獸鏡は九州島から本州島東部まで出土する。



213 短甲の出土数 短甲の35パーセントまでがのちに畿内と呼ばれるせまい地域から出土している。古墳出土の甲冑を研究している小林謙一さんの調査結果だ。(分布自体は岩手県まで及ぶ。—安部注)



[ 9 ] ①頭長幅示数分布 小浜基次(1960)



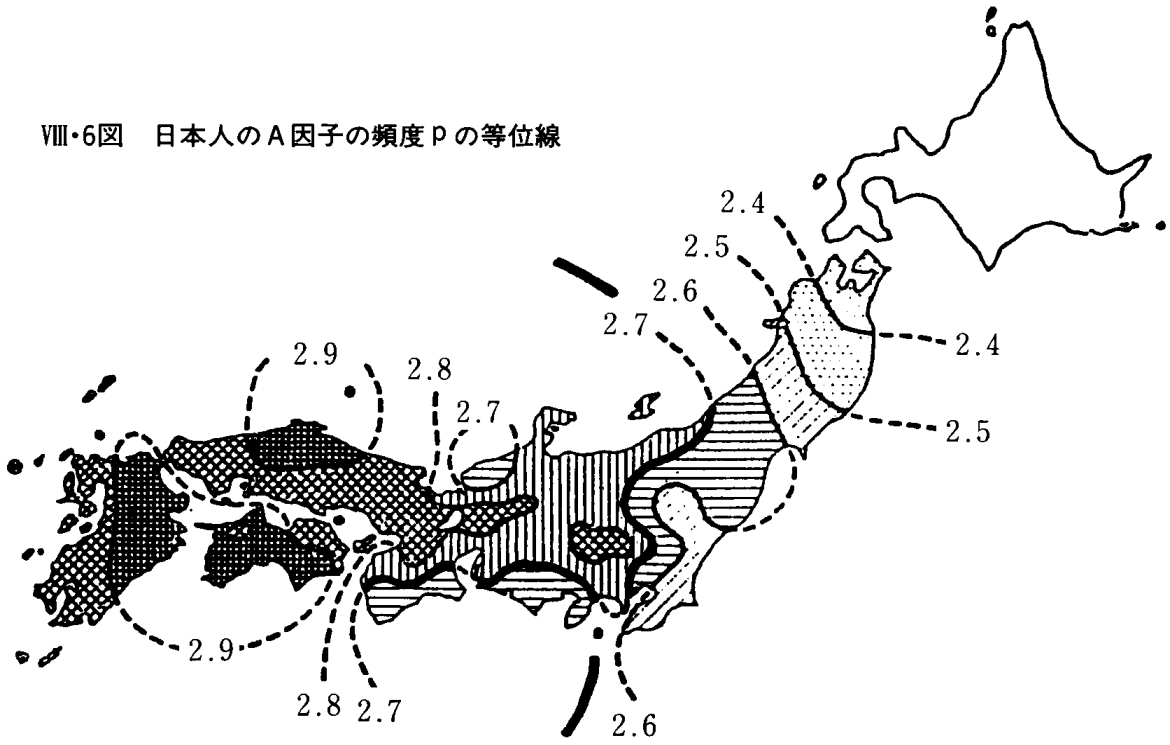
[ 9 ] ②頭長幅示数分布 (示数81.5%以上の分布) 岩本光雄(1963)に基づき鈴木秀夫(1978)



第26図 頭長幅示数の分布 (岩本、1962)

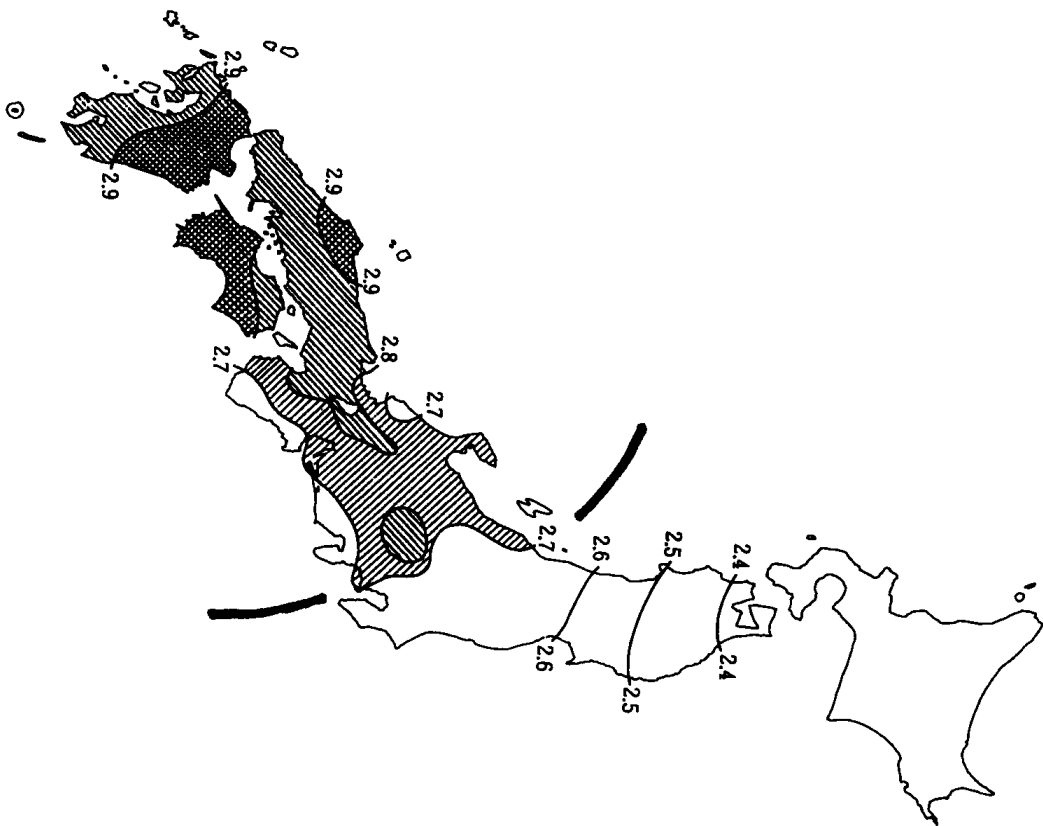
[10] ①血液型A因子の等位線

古畑種基(1962)



[10] ②血液型A因子の等位線 (P=2.7以上の分布)

古畑種基(1962)に基づき鈴木秀夫(1978)



第16図 血液のA因子の頻度Pの等位線 (古畑、1962)

VIII・6図 日本人のA因子の頻度Pの等位線

[11] 顔高 (高顔・低顔) の地域差  
 LEVIN(1971) [山口敏(1986)より]

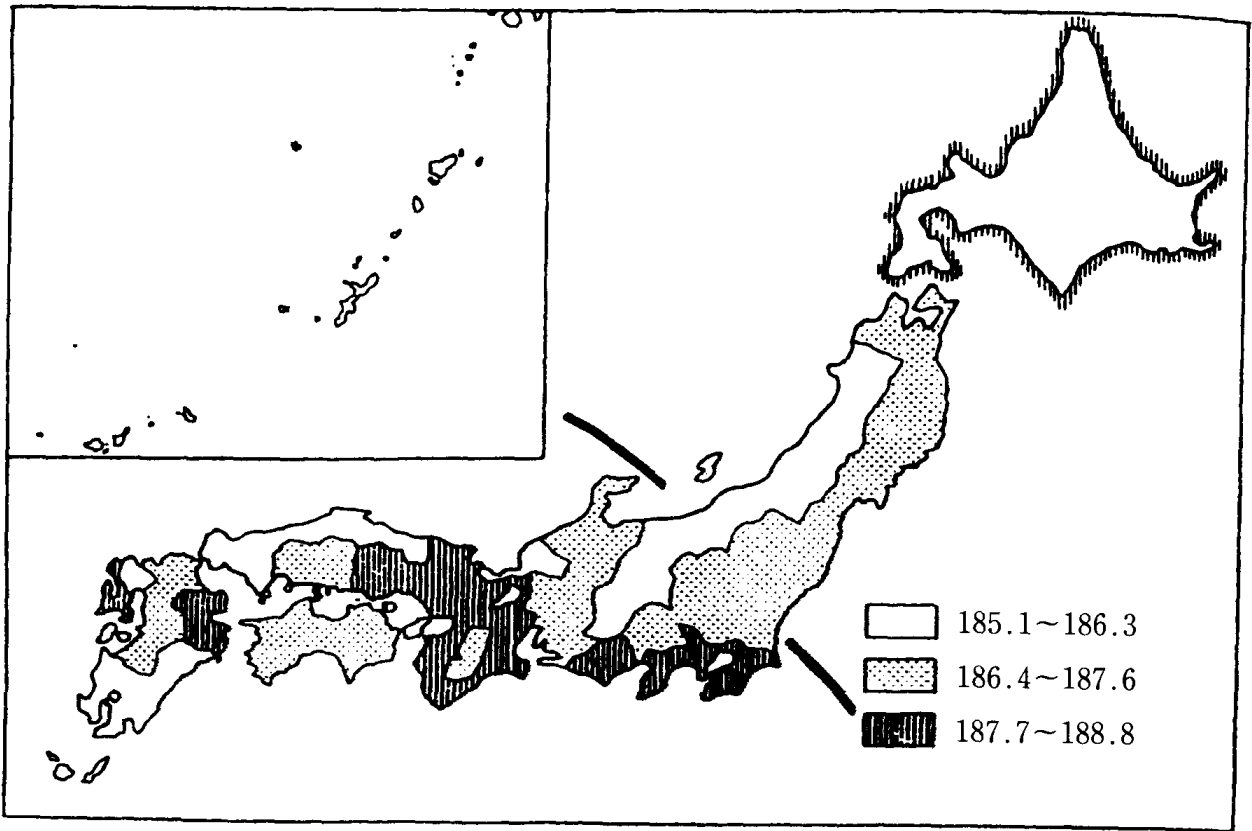
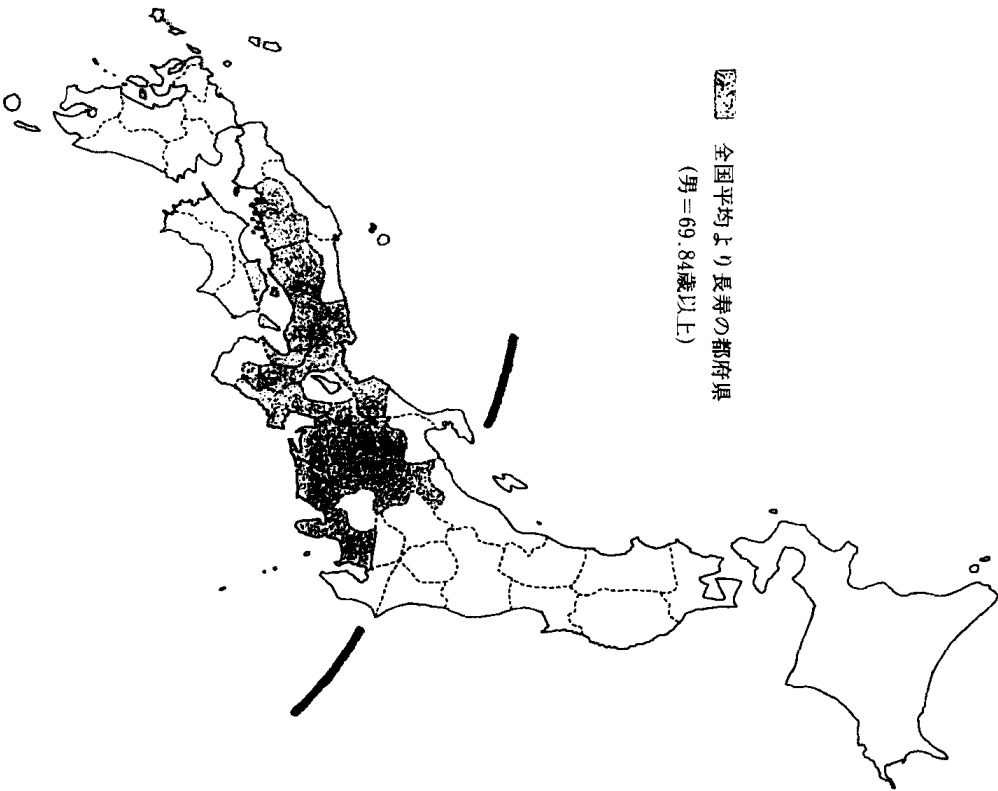


図16 顔高の地域差 (レヴィン、1971による)

[12] 長寿県 厚生省(1970) [鈴木秀夫(1978)より]

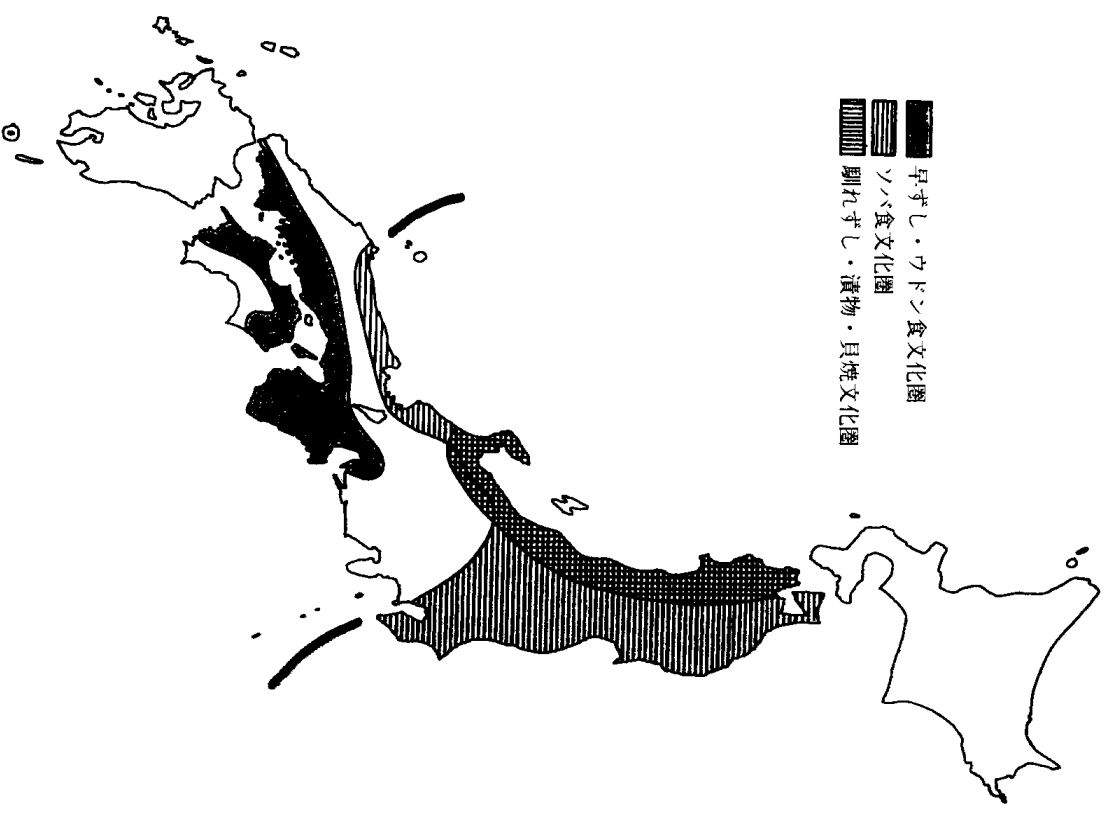


第36図 長寿県 (厚生省、1970)

[13] 食べ物文化圏 (そば食文化圏)

近藤 弘(1973)

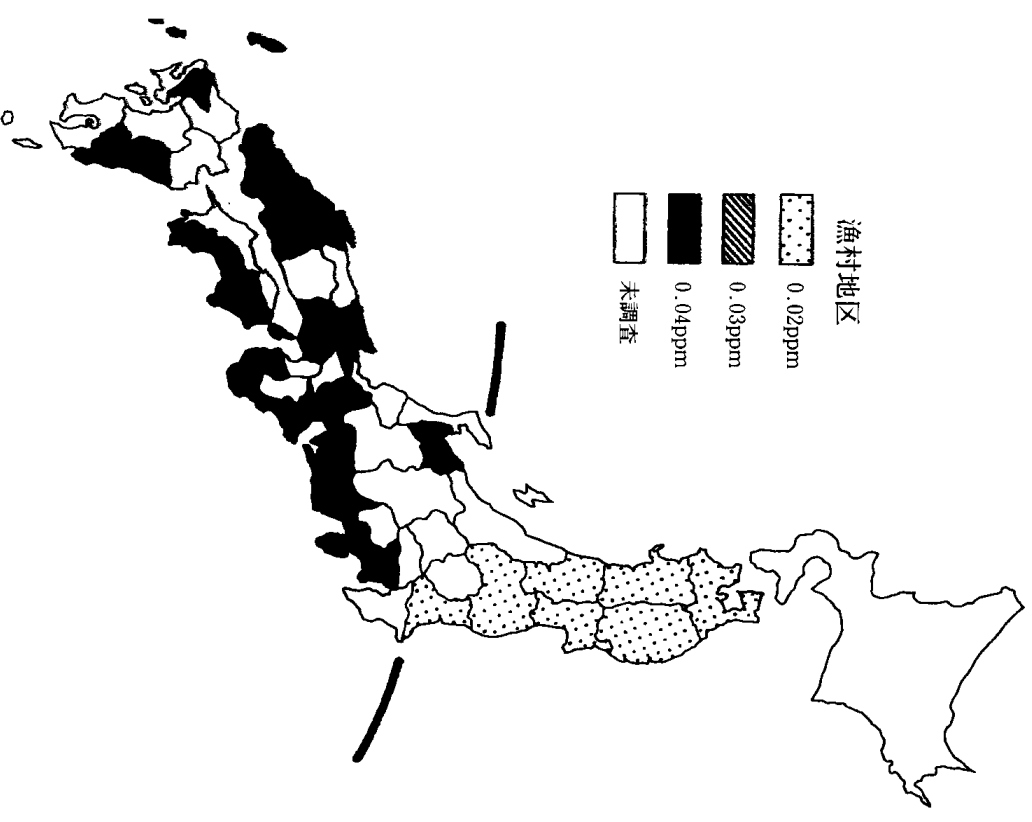
[鈴木秀夫(1978)より]



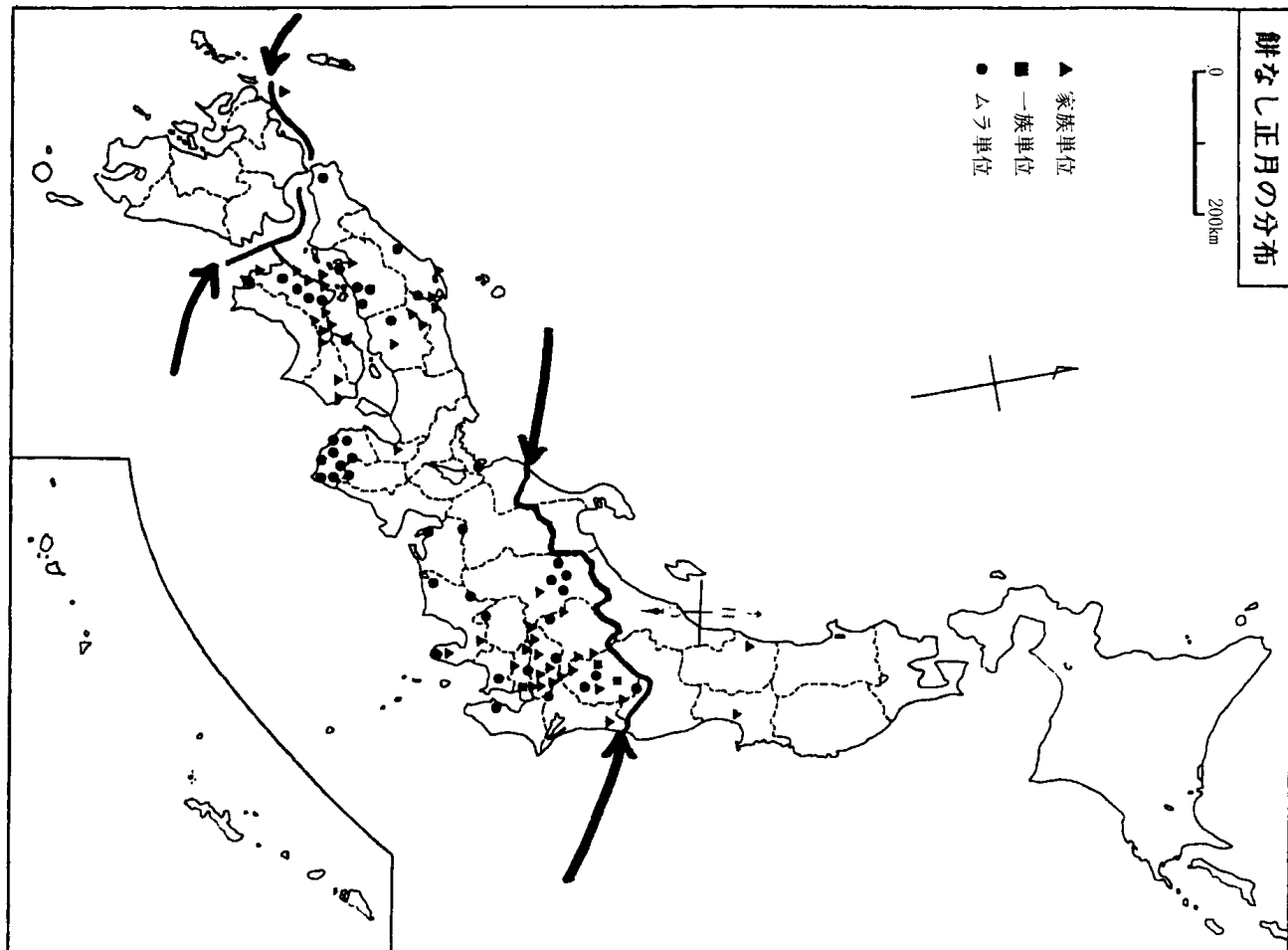
第28図 食べ物文化圏 (近藤、1973)

[14] 母乳中のPCB平均濃度 (食物文化)

厚生省 (1974) [鈴木秀夫(1978)より]



第35図 母乳中のPCB平均濃度  
漁村地区 (厚生省、1974)



[16] ①民家の諸指標の分布 (地床形式・土間極小型)  
杉本尚次(1977)

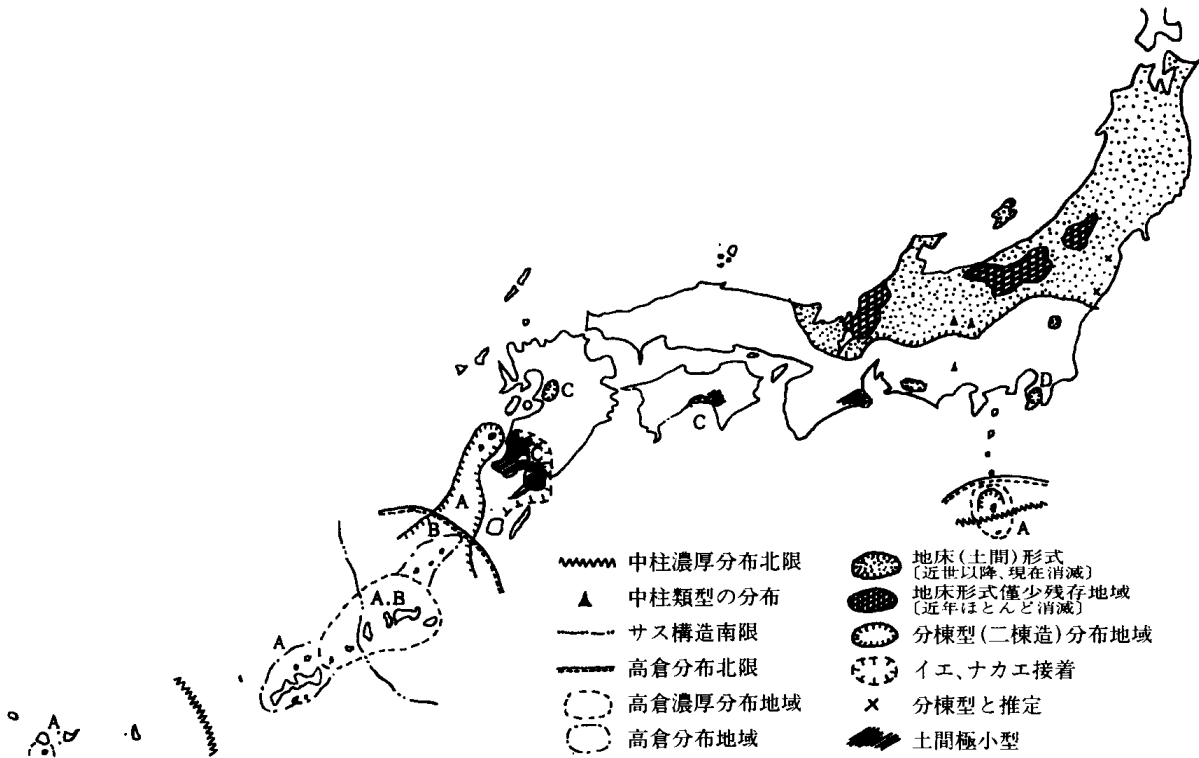
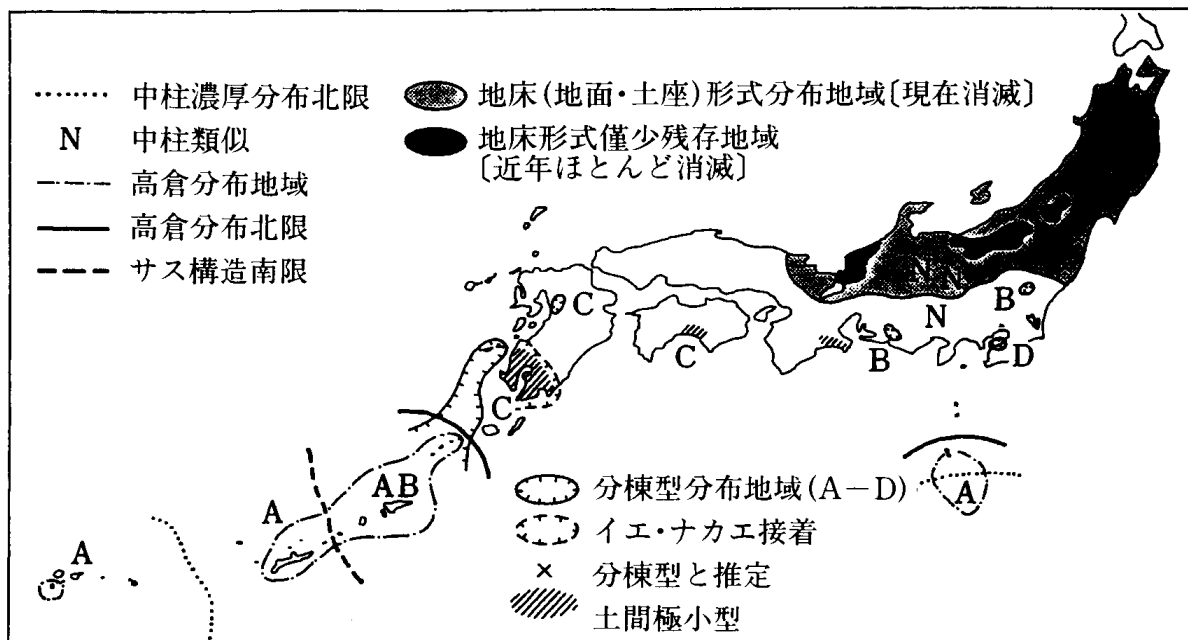


図33 民家諸指標の分布

図6-5 民家の特色の東・西 (杉本尚次、1975による)



[16] ②参考図：民家の特色

杉本尚次(1977)か？  
[佐々木高明(1993)より]

この図は日本の民家の諸特徴の分布を示したものだが、竪穴住居の伝統をひく地床型の住居が、東北日本にひろく分布し、最近まで北陸地方や近畿地方の北部にも分布していたことがわかる。

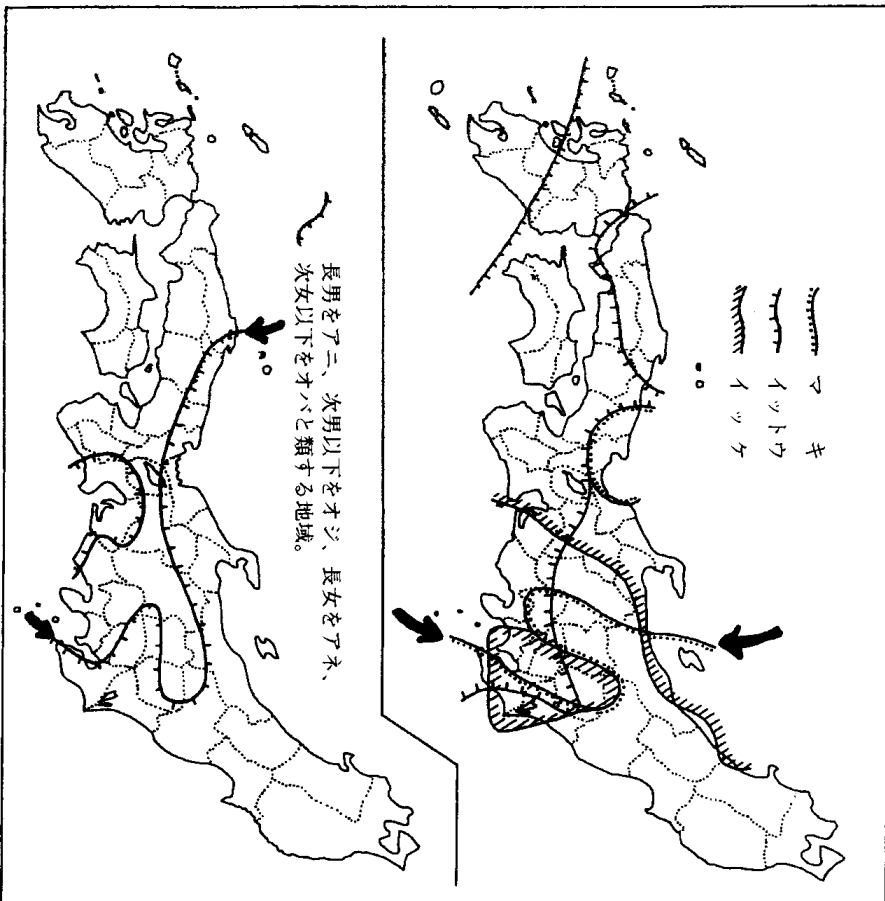
[17] ① 本家・分家集團の呼称 泉 靖一ほか(1963)

第1図 (資料R III) 本分家集團の呼称(1)



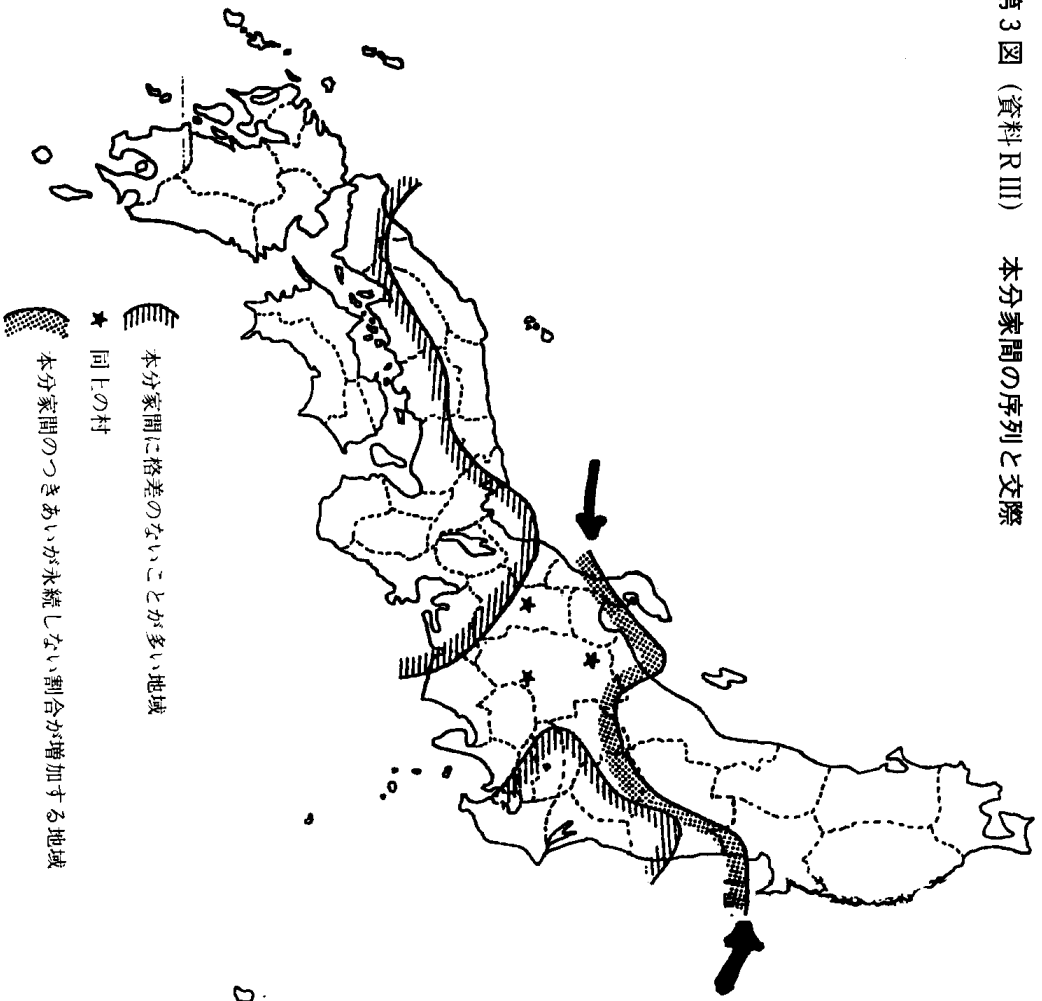
[17] ② 参考図：本家・分家集團の呼称／長男・長女の類別呼称  
 泉 靖一ほか(1978) [佐々木高明(1993)より]

図6-6 本・分家集團の呼称<上>、長男・長女の類別呼称<下>(泉靖一ほか、1978による)



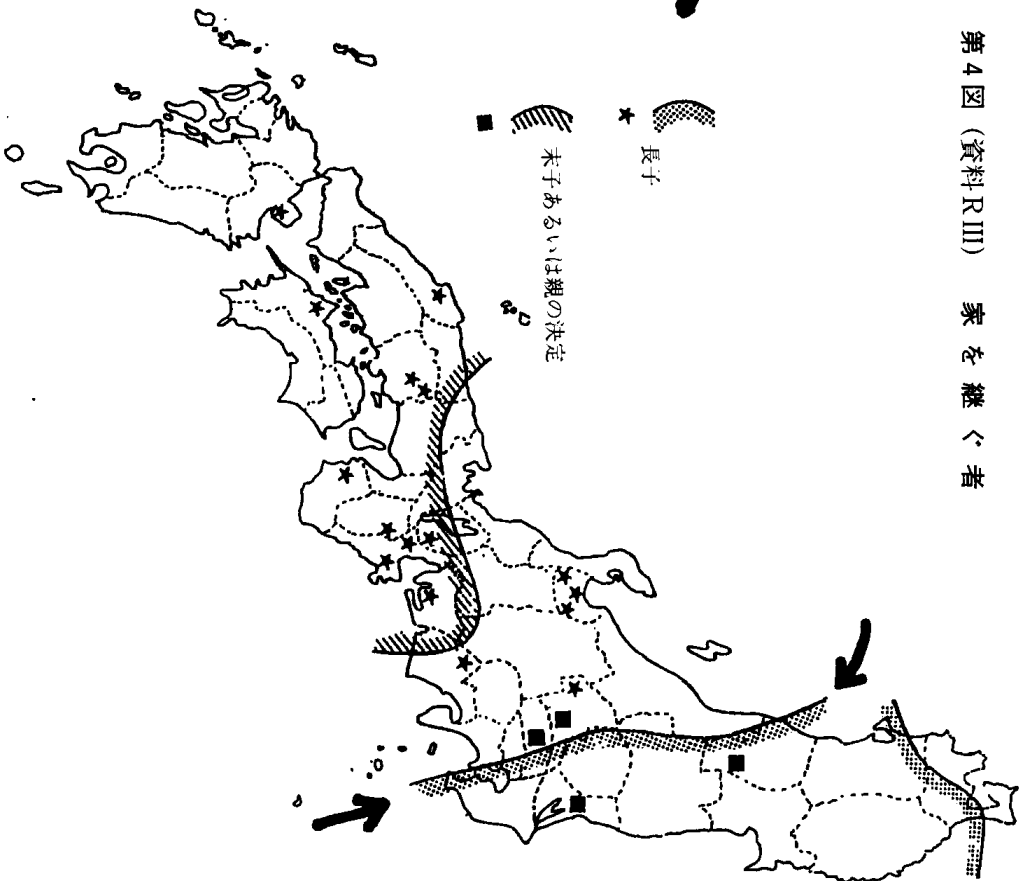
[18] 本家・分家間の序列と交際 泉 靖一(ほか)(1963)

第3図 (資料R III) 本分家間の序列と交際



[19] 家を継ぐ者 泉 靖一(ほか)(1963)

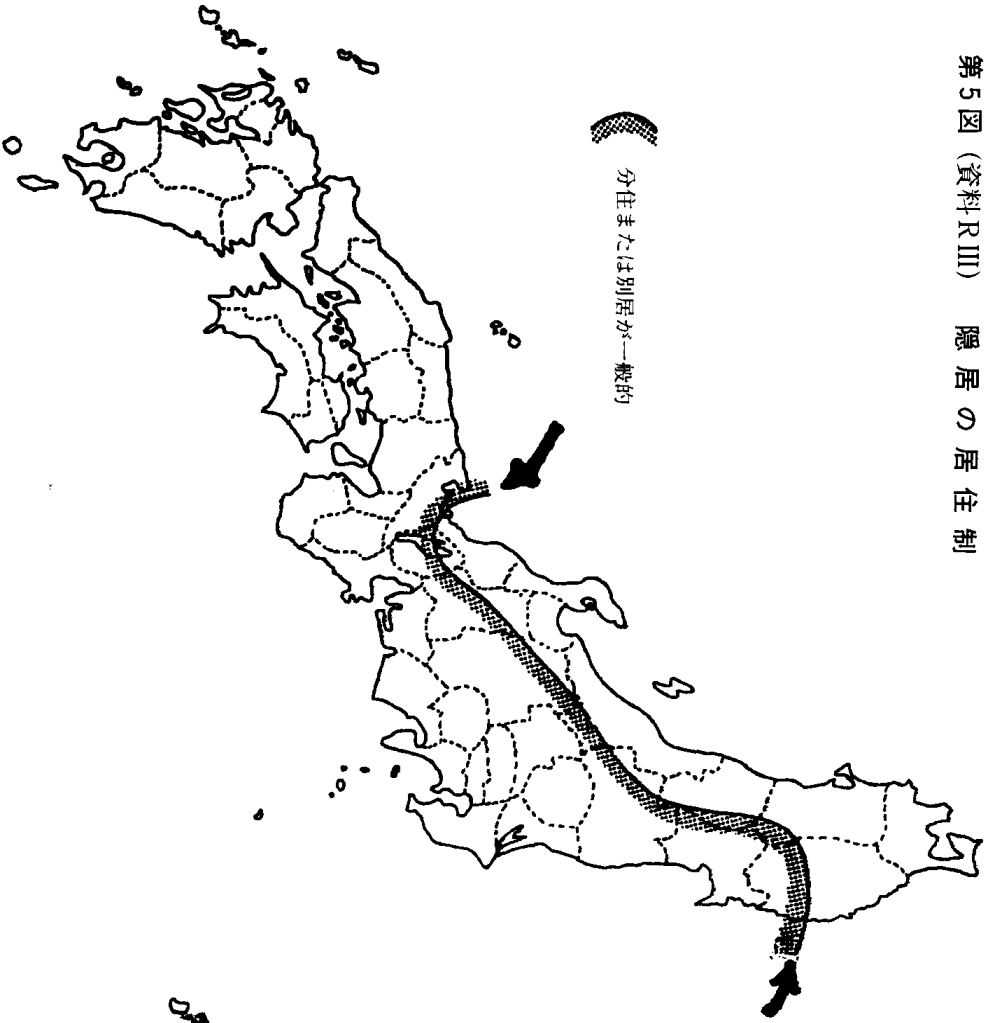
第4図 (資料R III) 家を継ぐ者





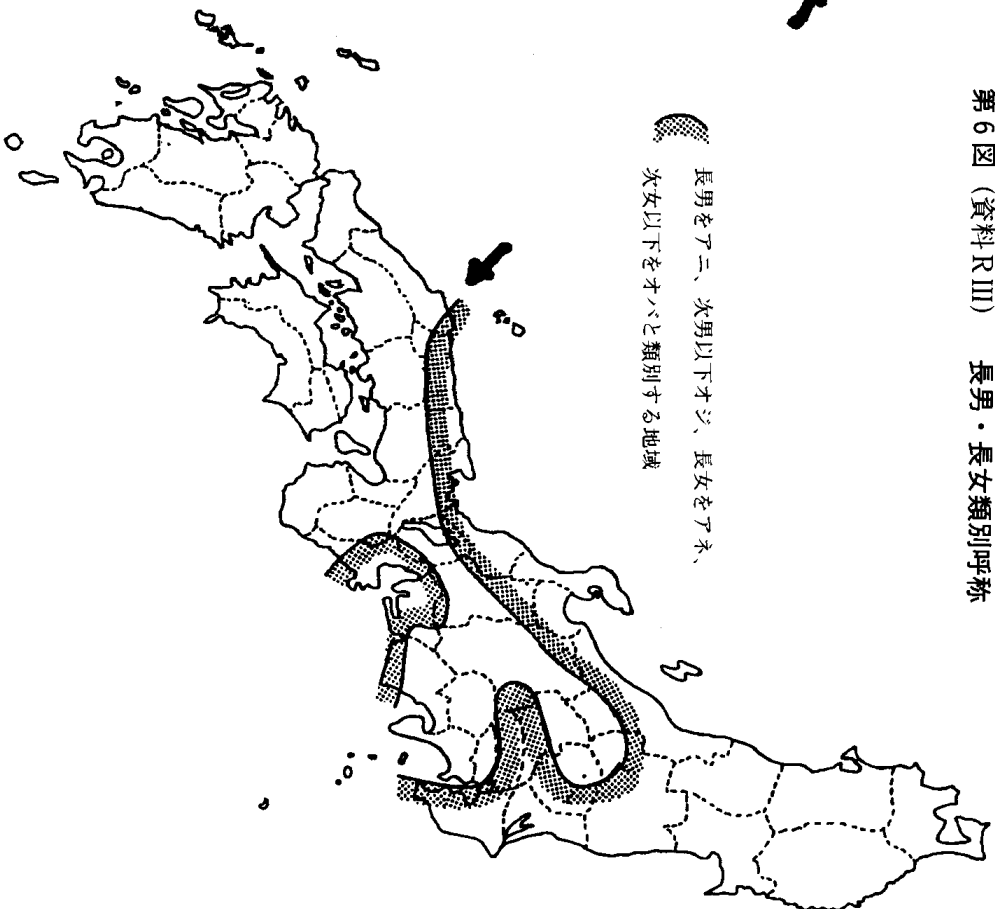
[20] 隠居の居住制 泉 靖一ほか(1963)

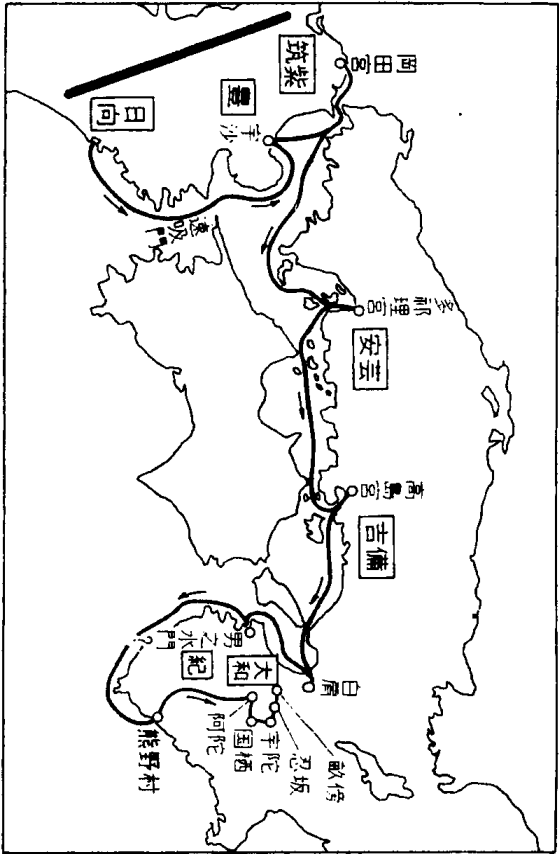
第5図 (資料R III) 隠居の居住制



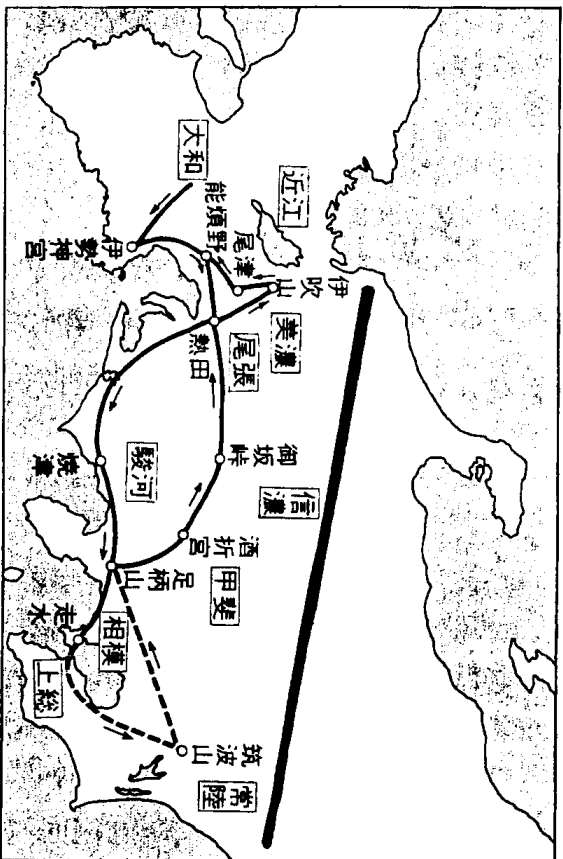
[21] 長男・長女の類別呼称 泉 靖一ほか(1963)

第6図 (資料R III) 長男・長女類別呼称





『古事記』による神武東征路



『古事記』による倭建命の東征路 (-----行程不明の仮線)

Hybrid Origin of Japanese Subspecies of Mice

[23] ①ハツカネズミの分布 YONEKAWA・MORIYAKI (1988)

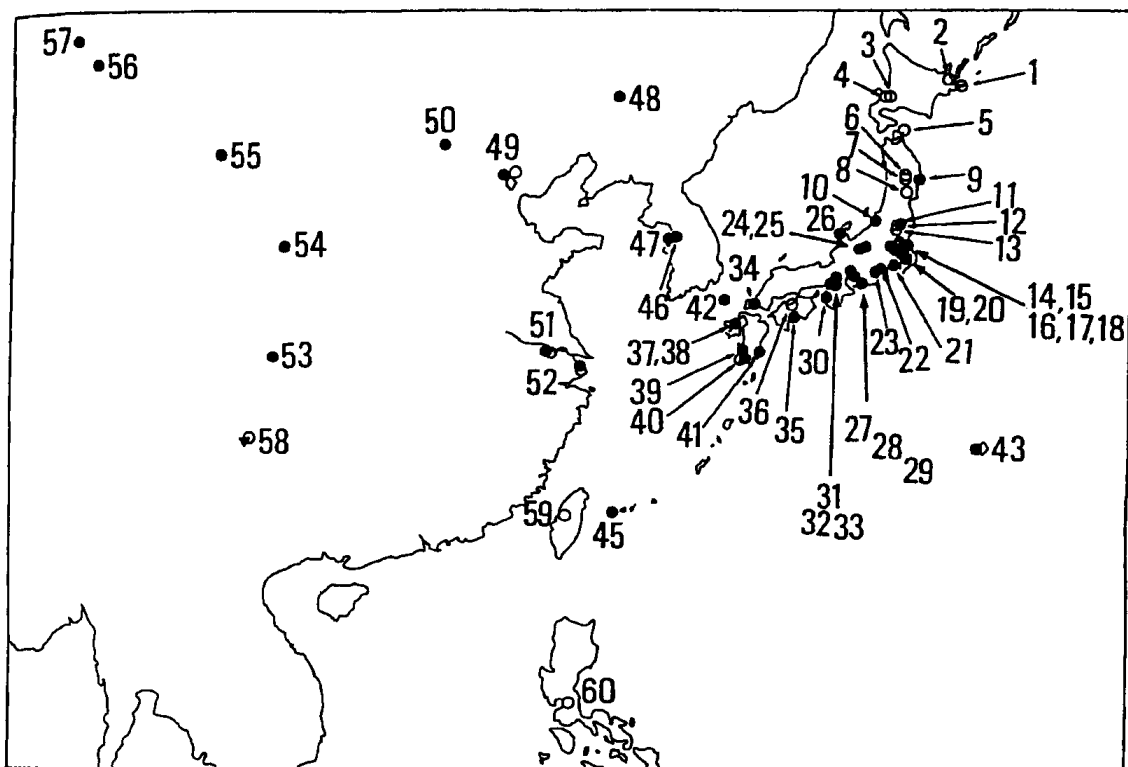
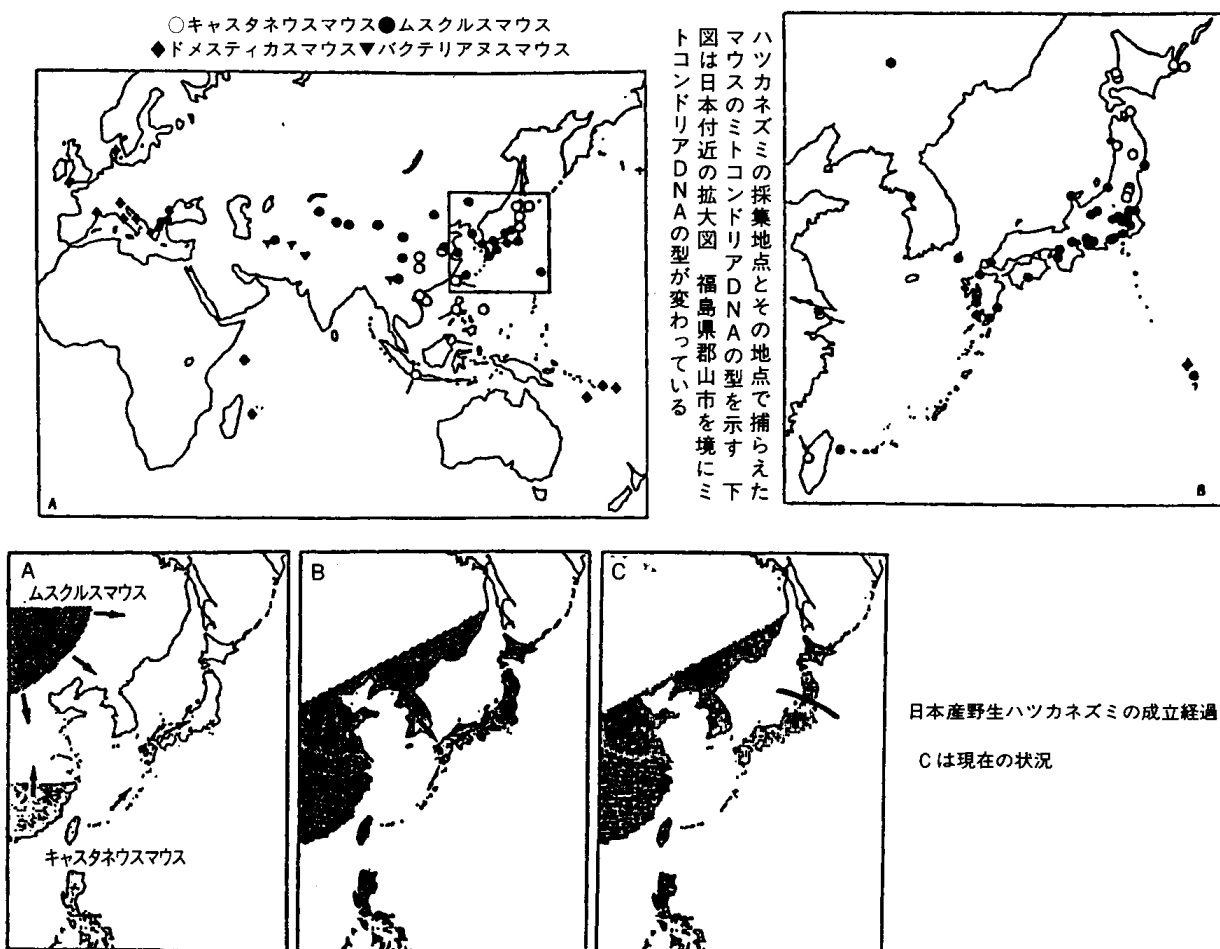


FIG.1. -Localities where wild mice were collected, mtDNA types are indicated by symbols: ○ = castaneus; ● = musculus; ◇ = domesticus; and ▼ = bactrianus. Localities are numbered as in table 1.

[23] ②参考図：ハツカネズミの分布の成立経過

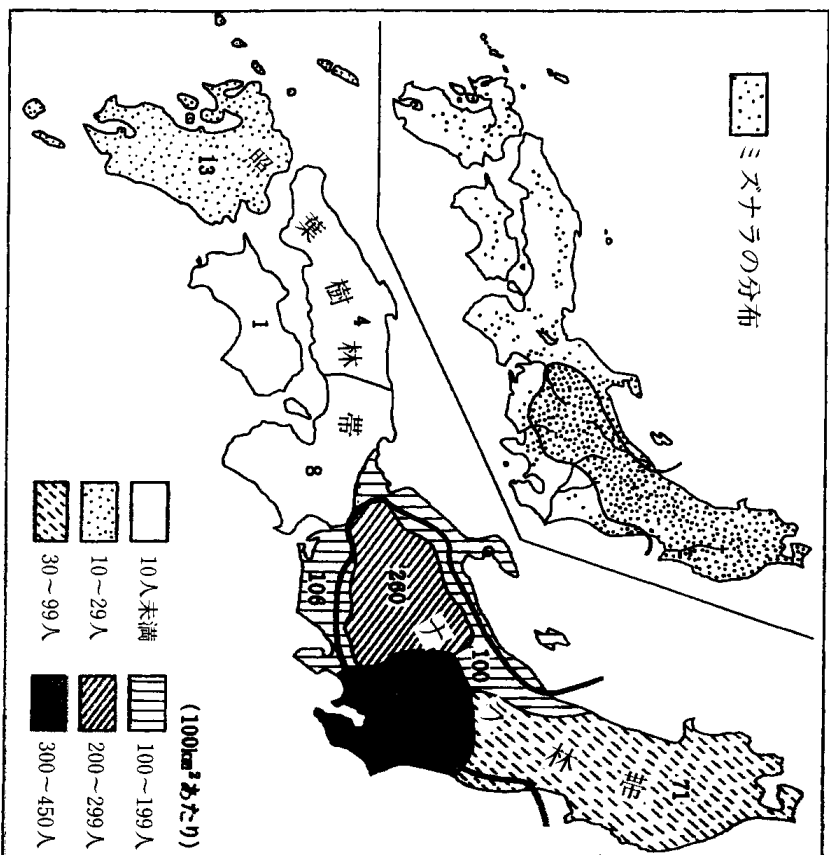
サンデー毎日編集部(1997・5・25)より



「関東・越後線群」の基盤として考慮される分布

[A] 縄文時代の森林分布 (ナラ林帯—照葉樹林帯)  
佐々木高明(1993)

図2-2 縄文時代(中期)の人口分布と森林分布



図中の数字は100km<sup>2</sup>あたりの人口密度。人口密度の数値は小山修三による。

[B] 年間平均気温の等温線 佐原眞(1987)

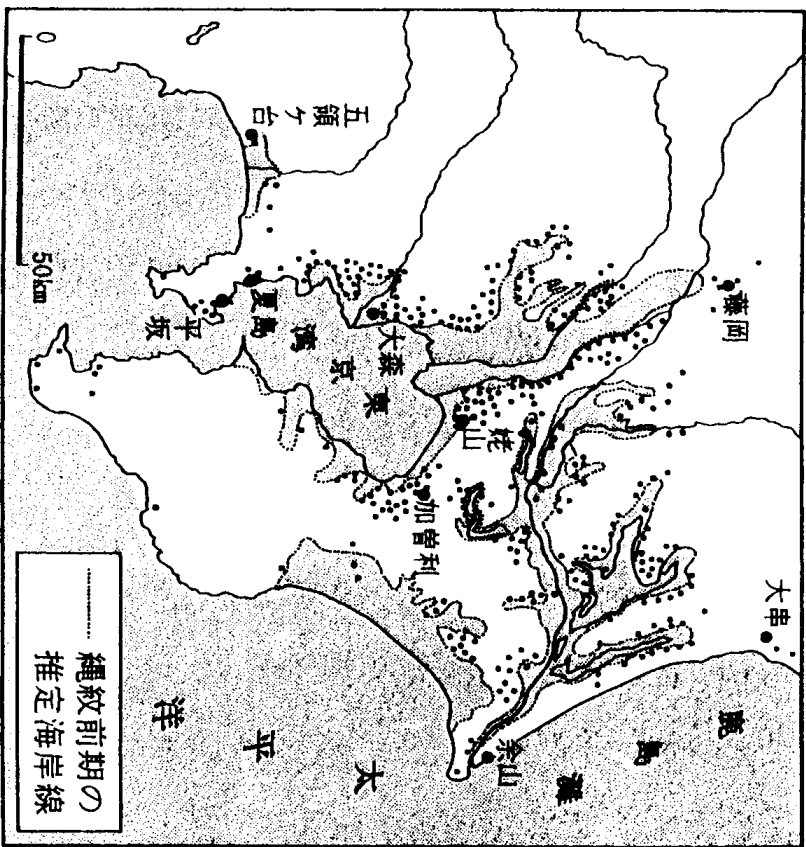


針葉樹林帯は北海道東部と本州北半の高山域に分布し、落葉広葉樹林帯は北海道西部から関東・中部地方の内陸部に分布、常緑広葉樹林帯は関東・中部地方の海岸部以西に分布。

(安部注一必ずしも13°Cという数字にとらわれる必要はない。)

[C] 関東平野の縄文時代の海岸線

江坂輝彌原図  
[佐原眞 (1987) より]



縄文時代の海岸線と貝塚の分布

江坂輝彌原図より

[D] 細石刃の文化圏

小田静夫 (1986)  
[佐々木高明 (1993) より]

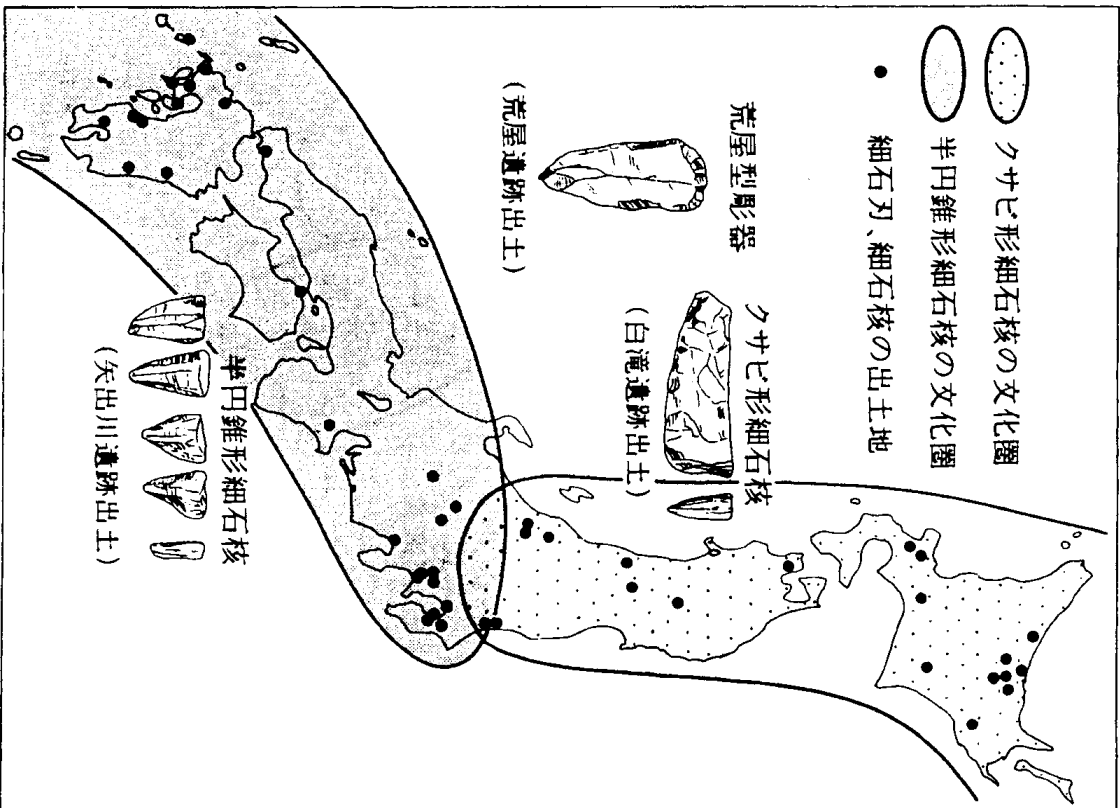


図6-7 細石刃文化の東と西 (小田静夫, 1986による)

言語地理学から見た日本語方言の重層性

SEVERAL STRATA IN THE HISTORICAL FORMATION OF JAPANESE DIALECTS					
時代	Age	Stratum	言語地理学から見た日本語方言の重層性	Language of Influence	Sphere of Influence
B. C. ↓	B. C. ↓	I		One Kind of	
文献時代以前	PRELITERATE ERA	II			

<p>A. D. 4 C S</p> <p>A. D. 12 C</p> <p>19 C</p> <p>18 C</p> <p>8 C</p> <p>20 C</p>	<p>上代 · 中古 · 中世 · 近世 · 近代 · 現代</p>			<p>1st Superstratum (West Japanese Superstratum)</p>	<p>西日本上層語 (九州層?) Itoigawa-Hamanako-Line Kanto-Echigo-Lines Aze (ridge of the rice field) ⇨ rice crop Mayo(eyebrow) = ? Mayo(cocoon) ⇨ sericulture Bai(一畝灰) ⇨ *kwaai[ashes] ⇨ ? ⇨ Chinese 灰[kwai] Iishi(ox), So( hemp thread) Ito(silk thread) ⇨ sericulture Kasazu (frog) Taotiguku (load) Yomu(count) ⇨ letter·calendar</p>		
<p>12 C</p> <p>19 C</p> <p>18 C</p>	<p>West Japanese Stratum (spread stratum) (2nd Superstratum)</p>	<p>西日本中央語傳播層 東日本傳播層 Keikiki Keihan(京畿·京阪) Edo(關東)·江戸 Rai(thunder) Sa(to)</p>		<p>East Jpn. Str.</p>			
<p>Common Japanese Stratum</p>	<p>Common Japanese Stratum (spread stratum)</p>	<p>近代全國層(共通語) 東京 Tokyo</p>	<p>English</p>	<p>vocabulary</p>			